

インターネット歴史学コンテンツと社会への発信

―「せんだい歴史学カフェ」の活動より―

大谷 哲

自己紹介（歴史学カフェとは何か、そして我々は何者なのか）

「せんだい歴史学カフェ」とは、月に一度程度の周期で歴史学にまつわる話題を取り上げて放送する、インターネット上の放送番組と、その放送を手がける集団である。二〇一一年に活動を開始し、この原稿執筆時点の二〇一九年三月時点で、計八二回の放送を行ってきた。放送開始時はユーストリームという動画共有サービスを利用していたが、二〇一八年からのユーストリーム無料プラン提供終了に伴い、無料で利用できるブロードキャストینگ配信サービス「ツイキャス」に放送媒体を移行して現在に至っ

ている。

せんだい歴史学カフェの活動は、このツイキャスチャンネル (<https://twicasting.tv/sendaihiscafe/>) での放送（生放送以外に、録画も一定期間アーカイブされる）ならびに、主に告知と放送後に放送内容にかかわる参考文献一覧を提示しているブログ（こちらは <http://sendaihiscafe.tumblr.com/>）、同じく主に告知に活用しているツイッターアカウントでのツイート (@SendaiHiscafe) でご覧いただくことができる。また放送内容については、先述のブログの他、放送中のツイッターでの歴史学カフェメンバーならびに視聴者の実況的コメントを集積して編集した、「together」

をも活用してまとめている（例として二〇一九年一月に行われた第八一回放送「猪と豚のあいだ…西洋史のなかの猪と豚」など：<https://together.com/ji/1311162>）。

これらの諸媒体を通して、せんだい歴史学カフェは毎回どのような内容を放送しているのかというと、各回で歴史学にまつわるテーマを定め、放送時の参加メンバーが順に自己の専門分野から関連するエピソードを紹介し、視聴者から寄せられるコメント（コメントの投稿方法はツイキャスのコメント欄記入やツイッターのハッシュタグ#SendaiHiCafe 投稿がある）をピックアップして質問や意見に応えることが中心となっている。

このように歴史学についてインターネットでトーク番組的な放送をしようと活動している我々は何者なのかというと、仙台につどった若手西洋史研究者約一〇名である。会の創設者である永本哲也（現獨協大ほか兼任講師）や筆者大谷（現東海大特任講師）のように、博士号を取得し、さらには生活・研究拠点が仙台を離れている者も複数いるが、活動開始時にはオリジナルメンバーが全員、仙台のとある国立大学の同じ研究室に所属する大学院生であったため、この名称が選ばれた。現メンバーにも大学院生、ポスドドクターが含まれている。なお、メンバーの専門分野は近世ドイツ宗教史、古代ローマ政治史・社会史、近代ドイツ思

想史、近代ドイツ政治史、中世フランドル文化史、初期キリスト教史、熊の文化史などなどである。ちなみに、本稿は筆者大谷が代表して執筆しメンバーにチェックをしもらっているが、筆者の個人的な感想や思考をも含んでいることを御承知おきいただければ幸いである。

歴史学カフェの放送（我々は何をしているのか）

歴史学カフェの放送は概ね月に一度、つまり年に一二回あるので、各回の放送テーマについては事前に打ち合わせをしている。年に二度ほど大編集会議を開催し、メンバー一同が揃うウェブ会議で事前に書き込んだ「ネタ帳」ともいうべきテーマ・エピソード・アイデアを見ながら、「このネタは面白そうだ」「このテーマなら自分もこういう歴史上のエピソードを紹介できる」「クリスマスに関するテーマなら一二月に行おう」「来年は猪年だから、一月に猪や豚の文化史をテーマに放送しよう」などと話し合い、大まかに半年程度の予定を立てておく。毎月、次の月の放送が近づく前に持ち回りの仕切り役が参加可能メンバー、メンバーの放送可能日時やネタのすり合わせを行い、ウェブ上で放送日時とテーマを告知し、実際の放送を行う。司会、放送視聴者をアシストする目的での用語解説や実況的

ツイート、放送後の参考文献一覧の作成やウェブ投稿は各自フレキシブルに分担してこなす。ちなみに放送告知で用いるテーマタイトルは、できるだけ駄洒落を活用したいという不文律のようなものがある。まにか生まれ、大の大人が歴史用語を駄洒落にしようと必死に会議で頭をひねる様子は、実は本放送より面白いのではないかと筆者は個人的に思っている。

しかし放送テーマの選択は、かなり真剣である。後述するように歴史学カフェの活動には、歴史学の面白さを研究者以外の人々に、楽しく伝えたいという意図がある。同時にその意図の背景には、歴史学（あるいは歴史学研究者という生き方）の現状と将来に対して決して楽観はできないのではという危機感もあるため、どのようなテーマとエピソードを紹介することに意義があるのか、意義あるテーマはどうしたら面白さを伝えられるのか、という点で我々の悩みは尽きない。

歴史学カフェ発足の経緯と目的（我々はなぜこんなことをしているのか）

せんだい歴史学カフェには大上段にかまえたスローガンはないが、先述したとおり歴史学の面白さを、歴史学研究

者ではない一般の人々に、肩ひじ張らずに楽しく伝えたいという理念めいたものがある。その背後には、我々歴史学研究に携わる人間が感じている面白さは、社会一般に伝わり得るものだという考えがあり、同時に、社会一般の人は、歴史学をそれほど面白いものだと考えていないのではないかという少しさびしい思いもある。また、我々は「歴史カフェ」ではなく、あえて「学」の一字にこだわって「歴史学カフェ」を名乗っている。これは名称を話し合って決める際に筆者が少しこだわった点であって、面白い放送を目指すなかで、単なる面白歴史エピソードの紹介にとどまってしまつては、研究者である我々がやる意味はあまりないという自戒を込めているのである。

このように書くとき我々せんだい歴史学カフェは大変崇高な使命感を帯びた、研究界の将来を背負わんとする若手研究者集団のようであるが、実際はまったくそうではない。そもそも、われわれがなぜ「せんだい」の地名を背負って活動しているのか。それは我々が、歴史学で食いつないでいくにはいささか、否かなり不利な地方の大学院出身者であるという自覚に理由がある。歴史学カフェ発足当時のメンバーは全員が地方国立大所属の貧しい大学院生であった。首都圏や関西の学会、研究会に出ていく機会も限られ、学術・教育・その他の仕事のチャンスを得ることに我々は

飢えていた。なぜインターネット放送なのか。田舎の大学院生がほぼ無料で全国全世界に自分たちの研究や知見を発信し、「顔売る」ことができるからである。そもそも歴史学カフェの活動は、田舎の大学院生の生き残りをかけた自己発信であった。筆者自身、歴史学カフェ創立メンバーの永本哲也に誘われたとき、そのインターネットを通じた活動には非常に懐疑的で、バーター的に参加を引きうけた。ちなみにその際に対価として求めたのは、まったく書き方がわからなかった日本学術振興会特別研究員採用申請書の相互ブラッシュアップであって、筆者個人に関して言えば、研究者としての生き残り活動の（極々採算性の低い）布石の一つとして歴史学カフェ活動を見ていたことは隠しようもない。

もう一つ裏事情を告白すると、歴史学カフェのオリジナルメンバーは、将来教壇に立つことを目指す者が多かったのに、非常に話下手であった。恐ろしいことであるが、我々メンバーは「面白く」話すことができる腕がないのに、その技量を磨こうとインターネットで全世界に向けて小嘶をして練習をする、という暴挙に出ていたといっても過言ではない。今ではメンバーの半数がさまざまな形で教壇に立ち、時には研究者として講演に呼んでいただくこともあるが、我々の二つの目論見、すなわち、自己発信と話術の研

鑽が成功しているかについては、今後も含めて見守っていただければ幸いである。

一部メンバーの極めて利己的な目的をはらみながらスタートした歴史学カフェ放送の活動は、それでもすでに八年間、計八十回を超えて続いている。放送時の平均視聴者数は三〇〇五〇名の間を推移し（ツイキャスでの放送を開始してからは目に見えて視聴者数が安定した）、寄せられるコメントは研究者としての我々にとって、非常に参考になっている。

SNSを利用し研究成果を発信している同業研究者から、長年放送を続けられるコツを聞かれることが多いが、複数のメンバーが参加可能なときに放送に参加するというスタイルがそれを可能にしていると思われるのと同時に、メンバーは放送を極めて楽しみながら行っている点が挙げられる。共時的なコミュニケーションに優れたSNSであるツイッターと連携しやすいツイキャスという媒体を選んで放送配信を行うことは、メンバーそれぞれにとって大いなる議論と学びの機会であり、また歴史について語り合う楽しさに満ちている。ちなみに、視聴者がどのような属性の人々かについて我々メンバーも関心がないわけではないが、その内訳について必要以上に知ろうとしないことが重要だと考えている。ただ、歴史学に何らかの形で携わる（携

わっていた）人々との交流も大事にしているが、これから大学で歴史学を学ぼうと考えている若い世代の方や、あるいは歴史学に触れることなく社会で活躍されている方に關心を持っていただけなら、我々の喜びはひとしおである。

そのために重要になるのが放送各回のテーマや紹介エピソードであるが、その選定にはいささか注意を払っている。それは次に詳述するように、我々歴史学カフェメンバー個々人のゆくすえ以上に、歴史学の置かれている現状は厳しいものであると認識しているからである。

歴史学と一般社会（伝えたい相手と我々とのつながり）

先述したように我々の活動では、歴史そのものの面白さもさることながら、歴史学の思考法は世に広めるに極めて有意義だと考えていることも、一つの動機となっている。ここである歴史学の思考法とは、それほど特殊な思考様式や専門的な知識を指すものではない。自説を組み立てるときに逐一根拠を述べるといった歴史学に限られない姿勢や、論拠とする史料（ここでは過去の出来事を記した証拠のこととしておく）に対し、それが本当に過去のものか、過去の記録に後世の改竄が施されていないか、過去の記録を残した著者が地位や利害関係に応じて事実を捻じ曲げて

いないか、著者の思想や美意識によって、事実誤認や無意識の歪曲を被った記録となっていないか、と精査する史料批判と呼ばれる思考法こそ、我々がより一般に広まって欲しい（そして残念なことにあまり浸透していない）²と考えているものである。こうした歴史学に携わる研究者たちが重要視する思考様式や、歴史研究の成果が一般社会に共有されていないことに対する危機感を抱いているのは、何も我々だけではない。例えば歴史学研究会特設部会は二〇一六年に「歴史研究の成果を社会にどう伝えるのか―『社会的要請』と歴史学―」と題したシンポジウムを開催し、週刊誌編集者、学術書籍編集者、博物館学芸員を登壇者に向かえて討論を行っている³。一般社会から歴史研究の成果や歴史的思考へのアクセスを向上させるためにも歴史史料や歴史研究の成果（すなわち論文）をインターネット上で誰でも閲覧できる環境を整えるべきとの提言も相次いでいる⁴。歴史学研究会が二〇一七年に上梓した『歴史を社会に活かす』は、教育や研究の世界に留まらない、文化やエンターテインメントなど様々な現場を視野に入れた歴史と社会の対話の模索を示している⁵。歴史学の成果を受け止めて新たなエンターテインメントが陸続と生み出されていることも、見逃すことはできない⁶。

歴史学カフェの理念と理想（伝えるべきことと伝えたいこと）

前述したように、我々の認識する歴史学と社会とのかわりは、歴史学の面白さと有益さを信じている我々にとっては、いささか危機感をもって対すべきものであり、そして多くの歴史学研究者とその認識は共有されていると思う。しかし、いうまでもなく歴史認識問題とはイデオロギーや政治権力によって何度も翻弄されてきたものであり、また前述したような社会状況のなか、歴史学の置かれる立場はますます厳しい。歴史の根拠を欠く「偽史」として名高い「江戸しぐさ」を道徳教材に残すと文部科学省が二〇一六年に明言したことも記憶に新しい。⁷⁾ 現在の日本社会は、歴史的なコンテンツは好かれるが、⁸⁾ 歴史学の思考法は一般的に忌避されているのではないかと悲観したくなる⁹⁾ ときもある。こうした危機感から例えば二〇一八年七月に行った第七六回放送では「フエイク・ニュースの時代に歴史を語る―捏造された歴史の歴史」（放送時のツイートまとめ：<https://togetter.com/li/1252258>）と題して、歴史的な過去の事実の再構成と疑似歴史構築の違いを論じたりもした。しかし、我々のスタンスは同時に、歴史学の思考や、歴史学者の論のみが常に正しく健全であると言

張ることとは一歩距離を置いている。そもそも歴史叙述とは数多ある過去の出来事の中からいくつかを選び出して、何らかの意図をもって配置する行為である。こうした切り口で歴史学と「偽史」を考えようと設定したテーマの例としては、二〇一八年一〇月に行われた第七九回放送「偽者騙（ニセモノガタリ）―歴史のなかの偽書・偽作」がある（放送時のツイートまとめ：<https://togetter.com/li/1283354>）。我々としては、では歴史学研究者による選択の基準とは何なのかを、個々の事例を挙げて、多くの人々と考えていきたい。そのプロセスを知れば、歴史との付き合い方に、より深い楽しみが生まれると考えるからである。

また、歴史学研究者という奇妙な生き物自体を知ってもらうことも、学術への理解と、一つの楽しみ方を提示できるのではないか。我々が勝手に大人気企画としてシリーズ化している「学会へ行こう！」（放送時のツイートまとめ：<https://togetter.com/li/980197>）は、学会シーズンである初夏や秋に、実際にメンバーが行こうとしている歴史学系の諸学会を紹介し、そこでどんな研究発表やシンポジウムが行われているのか、懇親会で我々のようなコミュニケーション能力低めの研究者はどう過ごしているのかを世に伝え、学者共同体と社会の垣根を低くしようという理想を掲げている。ただ、裏事情を話すと学会大会運営や自分の研

究発表でメンバーが忙しい時期なので、特に勉強や準備の要らないテーマで放送を乗り切っているという実情もある。

社会における歴史学の状況には厳しい側面もあるが、我々がこのように、時に自身の至らなさもさらけ出して「せんだい歴史学カフェ」を放送しつづけている最大の理由は、やはり歴史学を研究することが楽しく、そしてその楽しい歴史について、多くの方と肩ひじ張らずに語り合えることも、さらに楽しいからである。同様に、歴史学と一般社会をつなぐ活動として、柳原伸洋（専門はドイツ近現代史）による「歴史コミュニケーション研究会」(<http://historycommunication.blogspot.com/>)：一般に開放された研究会活動や、そのウェブ中継などを活発に行っている）や、藤野裕子（専門は日本近現代史）による「真夜中の補講」(<https://twitcasting.tv/fujinoyuko/>)：ツイキャスライブを活用した学術著者インタビュ、学術著書レビューなど）、研究者たちのインターネットを用いた双方向コミュニケーションの拡がりも目覚ましい。我々自身、今後も、等身大の歴史学者集団として、楽しむことを忘れずに「せんだい歴史学カフェ」の活動を続けていきたいと思っている（全URL最終閲覧：二〇一九年四月七日）。

(1) 歴史学研究者の社会への発信について議論された二〇一六年の歴史学研究会大会特設部会での討論では、佐藤大介氏からのコメントとして「市民は研究者があきらかにした成果の『受容者』にとどまるのか。メディア不信の背景にも通じると思われるが、研究者の『教えてやる』という姿勢を市民は敏感に感じるものであって、『ともに考えてゆく』という姿勢をより前面に打ち出していく必要があるのではないか」という発言が取り上げられている（『歴史学の成果を社会にどう伝えるのか』『歴史学研究』九五〇号、二〇一六年一〇月、二〇〇頁）。我々歴史学カフェは単にインターネットの無反応な虚空に向かって一方的に話し続けるのが楽しくないからこそ双方向性にこだわっているが、それは思わぬ利点となっていたのかも知れない。

(2) こうした史料批判等を含めて、歴史学者、あるいは広く人文社会科学者には一般的に思われる諸々の思考法が、それ以外の社会ではそれほど一般的でないことに関してはサム・ワインバーグ「渡部竜也監訳」「歴史的思考―その不自然な行為」（春風社、二〇一七年）に詳しい。また史料批判を含むワインバーグの歴史的思考法に関する考察と歴史教育の有用性の分析に関しては池尻良平「学習者から捉え直した歴史の可能性」岡本充弘ほか編『歴史を射つ―言語論的転回・文化史・パブリックヒストリー・ナショナルヒストリー』（御茶の水書房、二〇一五年、三三八―三六〇頁を参照）。

(3) 『歴史学研究』九五〇号、二〇一六年一〇月、一九九―二〇二頁。討論の中で奥村弘氏が歴史学にかかわる出版の激減に関連して述べた「…読者が減っているというならば、

読者を『作る』ためにはどうしたらよいかを意識的に考えるなかにも学会や研究者の役割があるはずで、単に成果を返せばよいということではなく、（市民との間で）歴史学のプロセスを共有するためにはどうしたらいいのかを考えていかねばならないのではないか」（二〇一頁）という意見は示唆的である。

(4) 例えば日本の人文社会科学系学術雑誌が「いまだOA（引用者注：オープンアクセス）どころか電子化すらされず、『秘境』とも呼ぶべき状況」にあると指摘する佐藤翔「『DHIP』ブリテイの王国、人文社会科学系学術雑誌という秘境」『DHIP No.4 オープンアクセスの時代』二〇一四年、一八頁（菊池信彦「デジタルアーカイブをめぐる現状と課題―歴史学のオープン化に向けた意識改革を求めて―」『歴史学研究』九七四号、二〇一八年九月、二四―三三頁も参照）。また人文学の苦境と呼ばれるものが「歴史学の思考そのものに問題があるわけではない。その思考が広く伝わりにくい状況にあり」としてデジタル時代に対応した学会活動と成果の公開を説く後藤真「デジタルアーカイブ」とアーカイブズ、そして歴史学を取り巻く現在と未来」『歴史学研究』九七四号、二〇一八年九月、二二―二三頁。

(5) 歴史学研究会編『歴史を社会に活かす―楽しむ・学ぶ・伝える・観る』（東京大学出版会、二〇一七年）。なお歴史研究の成果を一般に伝える様々な活動を、歴史学術書出版社経営と編集者の立場から紹介した同書所収の永滝稔「歴史学・学術書・読者の新たな関係を考える―編集者の立場から」（一八一―一九一頁）では、インターネットを利用した活動事例としてせんだい歴史学カフェが言及されている。

- (6) ここでは筆者が親しんでいる作品として、幸村誠が二〇〇五年から講談社『週刊少年マガジン』、後に『月刊アフタヌーン』で連載を続ける『ヴィンランド・サガ』シリーズが、中世北欧史研究者熊野聰のアドバイスを受けていたことを挙げる（熊野聰著、小澤実解説・文献改題『ヴァイキングの歴史―実力と友情の社会』（創元社、二〇一七年、二八一―二八二頁参照）。幸村の活動は現在、中世北欧史研究と現代日本文化の交流をつなぐ重要なものとなっている（幸村誠『漫画でつなぐ、中世北欧と現代日本』『史苑』七八巻二号、二〇一八年四月、四三一―六二頁参照）。
- (7) Satoru Ishido 記者「それは偽りの伝統 教材に残り続ける『江戸しぐさ』」文科省が教材に残す理由『BuzzFeed』二〇一六年四月五日 (<https://www.buzzfeed.com/jp/satoruishido/mext-edoshigusa>)。「江戸しぐさ」とその偽史性については原田実『江戸しぐさの正体 教育をむしろ偽りの伝統』（星海社新書、二〇一四年）を参照。
- (8) いわゆる疑似歴史と歴史学が混同される状況は日本だけのものではないが、例えばアメリカには偽史の虚偽性を暴露する定期刊行物『スケプティック』『スケプティカル・インクワイラー』が存在していることを挙げておきたい。米国の状況についてはロナルド・H・フリッツェ、〔尾澤和幸〕『捏造される歴史』（原書房、二〇一二年）を参照。
- (9) 歴史がエンターテインメントに無限のコンテンツを提供していることの例は枚挙にいとまがないが、例えばスマートフォンゲームアプリ『Fate Grand Order』を糸口にして、歴史エンターテインメントの受容と歴史的思考の共有が必ずしも一致して起こるものでないことを指摘した松原宏之「人

は『歴史する』、ゲームでもアニメでも」『史苑』七七巻二号、二〇一七年三月、一―八頁を参照。

- (10) 例えば江戸時代に偽作された中世古文書「椿井文書」が現代の地域文教行政に入り込んでしまっていた実態を追った馬部隆弘「偽文書『椿井文書』が受容される理由」小澤実編『近代日本の偽史言説―歴史語りのインテレクチュアル・ヒストリー』（勉誠出版、二〇一七年、二一―五九頁を参照）。

- (11) 日本中世史にはびこるいわゆる「陰謀論」的謬説・俗説を、歴史学的方法論を詳らかにして断じた呉座勇一『陰謀の日本中世史』（角川書店、二〇一八年）はこうした社会状況にあって注目すべき一般書である。

（東海大学特任講師・立教大学兼任講師）